圭陵會々報

2018 10月号 第361号

発行所／岩手医科大学圭陵会　〒020-8505 盛岡市内丸19-1　TEL 019-651-5111　FAX 019-624-8380　E-mail info@keiryokai.gr.jp　URL http://www.keiryokai.gr.jp
題字／三田定則 先生書　発行人／齋藤和好　編集人／前沢千早　印刷所／山口北州印刷

目次

齋藤和好圭陵会長ご挨拶…… 2
小川　彰理事長ご挨拶…… 3
祖父江憲治学長ご挨拶…… 5
教授就任ご挨拶…… 7
学術振興会研究助成・褒賞…… 8
医療専門学校入試概要…… 12
圭陵会本部だより…… 13
会則改定委員会、支部長・参与会
代議員会・総会、支部だより
医学部同窓会だより…… 25
評議員会・総会
私立医大同窓会東部会開催報告
歯学部同窓会だより…… 34
支部長会、評議員会・総会
寄稿・受賞報告…… 44
学生だより…… 46
医大グッズ・記念誌の紹介…… 49
お祝い・ご逝去・人事・編集後記…… 50

創立120周年記念事業　矢巾新病院建築工事進捗状況（平成30年9月11日撮影）
7月末上棟、9月現在南側足場解体、10月中には病院全景が現れる予定。

ご挨拶

圭陵会会長　齋藤和好

盛岡も日中は大分暑くなってまいりました。

本日は、支部長・参与会に多くの先生方にお集まりいただきましてありがとうございます。

石川育成会長の後任を務めさせていただいて2年目になりますが、どうぞよろしくご指導を下さい。

皆様ご承知のごとく昨年4月に岩手医科大学創立120周年を期に、記念式典と祝賀会が盛大に行われました。小川理事長先生は創立者三田俊次郎先生を初め多くの先人達が築いた建学の精神を胸において努力し、輝かしい歴史を作るように……と、すばらしい式辞を私達に与えていただきました。

加えて、本学の管弦楽団の生演奏のもと校歌を皆で合唱し、すばらしい余韻を残して式が終わったことを今でも昨日のように思い出されます。

更に、本年の3月の卒業式に於いては、医学部・歯学部・薬学部に加えて看護短期大学の卒業生達がヒポクラテスの医道規範に則り、本学の建学の精神である「誠の人間」と「人間愛と奉仕の心を持つ人間」たるべく努力することを誓い、夫々学窓を巣立って行きました。

残念ながらその後の国家試験の成績の結果があまりかんばしいものではありませんでした。ご参考までに、岩手医科大学医師会報2014年No. 115の誌上に学内3教授の「オープン問題制度の理念・展望」と題する提案が載っておりましたので一部引用させていただきます。

1. 「部分的な知識の蓄積のみでは、応用力がない。」
2. 「理解・記憶した知識を実践に生かすことが必要である。」
3. 「学生には、自主的な勉強態度を出させるようにすること。」

等々、先生方の積極的なご意見が提示されており、その先生方のご努力には頭の下がる思いでありますが、我々圭陵会員もすべからく協力する必要があるかと存じます。

さらに、少し古くなりましたけれども、2002年4月の朝日新聞の「私の視点」の欄に、当時の前金沢医科大学附属病院長先生が次のような辛口の批評をしておりました。

「医師の知識不足は許されない。」「国家試験不合格者はどの医学校にもいるが、落ちるのは医師としての職業の重い責任の認識の欠落による。」等々……。

最後になりますが、明日は代議員会・総会にご出席のため矢巾キャンパスの大堀記念講堂に行かれる先生方も多いと存じますが、矢巾キャンパスの病院の工事が着々と進み、偉容な姿をご覧いただけるかと思います。

今後も皆様方のご支援・ご協力をお願いをいたし、私の挨拶とさせていただきます。

（平成30年度圭陵会支部長・参与会より、
平成30年度圭陵会代議員会ご挨拶は15頁に掲載）

ご挨拶

学校法人岩手医科大学　理事長　小川　彰

圭陵会の先生方には大変お忙しい中、遠方よりご出席を賜り、本当にありがとうございます。日頃より大学の運営に多大なるご支援をいただいておりますこと、この場をお借りして厚く御礼申上げます。

今日は、新病院の状況を含めまして、大学の現況をお話させていただきます。

新病院の工事は現在8階まで上がってきており、この夏過ぎにはほぼ全貌が見える状況になります。

本学が矢巾町に来ることになり、矢巾駅及びその周辺もきれいになり、矢巾駅から岩手医大に続く道路も整備され、さらに東北高速道路の矢巾パーキングにスマートインターチェンジが開通し運用が開始されました。そして同インターから新病院までの道路も現在整備が進められております。又、矢巾町では、本学の本部があるA敷地を「医大通1丁目1番地」と、新病院のC敷地は「医大通2丁目1番地」と住所変更を予定しております。

国家試験について

先生方にはまずもって医師国家試験の成績不振について、お詫びを申し上げなければなりません。

明治30年から歴史をつないでいる私立医大は東京慈恵会医科大学と本学のみであり、歴史の古さでは本学は2番目です。その歴史から、本学の国家試験の成績を考えれば、本来であれば私立医大29校中2番目でなければならないのですが、大変皆様には恥をおかけをしているということで、本当にお詫びを申し上げます。

一方、歯学部は歴史としては50年を超えました。その中で初めの20数年間は国公立も羨む国家試験合格率ほぼ100%を続けてきた名門歯学部でした。しかしながらその後国家試験の合格率が低迷しておりましたが、この10年程前からハーバード大学と連携をし、歯学部改革プロジェクトを発動してきた結果、V字回復をし、現在はV字の上の方になってきております。

そういう意味では、医学部では教員の学生に対する甘さがこのような事態を起こしている大きな原因の一つであり、この事態を打開すべく教員の意識改革、学生に自ら勉強する姿勢を作らせること等について教員に対する指導を含め強力に進めております。その結果、教授会そして教職員一丸となって頑張っておりますが、一度低迷した成績を回復させることはかなり時間のかかることであり、来年直ぐに良くなるということではありませんが、先生方に恥をおかけするようなことがない母校に成るべく、鋭意努力してまいります。

一方、昨年発足をした看護学部は優秀な学生が多く集まっており、現在2年生まで進んでいます。4年間で看護学部は完成をし、その後将来的には看護学部大学院も設置するということで、大変期待をしております。

本学の教育・研究に関するコンセプト

本学は昨年4月より4学部となりました。その中で、医・歯・薬・看護という医療系の学部が同一キャンパスにあるというのは、全国には例がありません。将来医療人として医療現場で一緒に働く者であろう医・歯・薬・看護の学生が、学生時代から顔の見える環境の中で勉学する環境を提供しているのは本学だけです。

講座については、普通は各学部に分かれているのが基本ですが、本学では矢巾に教育部門が移転する際、文部科学省に行き横断的に講座を作ることが出来ない

かというお願いをしました。しかし、同省では初めは今までそういう前例はないということでなかなか許可がおりませんでしたが、現在は大変すばらしい取り組みなので、他大学の模範となるよう運営して欲しいと言われております。又、普通の大学では学部毎に建物が別にありますが、本学では学部毎の建物は一切なく、岩手医科大学の講義・実習棟そして研究棟ということで、その中で各学部の垣根のない連携により、教育・研究が行われています。

矢巾新病院について

新病院は来年の9月に開院します。設計にあたっては、当初は、内丸は8千坪に対し、矢巾キャンパスは12万坪という広さから低層で伸び伸びと療養ができる病院が良いのではと考えましたが、全国、又、海外の病院等を視察をする中で、患者さんの高齢化が進み、多くの病気を持ち、多くの診療科・検査室を回る患者さんのため、患者さんの動線を一番に考えた設計としました。

併せて、全国の国立大学では医師は病棟とは別棟の臨床研究棟等におり、患者さんの急変に時間的に直ぐに対応出来ない現状にあることを踏まえ「医師は患者さんのそばに」ということで患者さんのいる病棟に医局を配置しました。

又、新病院は災害に強い病院として、東海・東南海・首都直下型の大震災の時にはバックアップ機能を担う災害拠点病院となります。その中で新病院の直ぐ後ろにはドクターヘリ基地があり、患者さんを1分で高度救命救急センターに搬送出来る機能的・合理的な配置としました。さらに、新病院の隣にはエネルギーセンターがあり、全ての病院機能を1週間程度持たせることができる病院となっています。

なお、新病院の同じ敷地内には岩手県の高度医療ゾーンが形成されることとなっており、そういう意味で、世界に冠たる設備・施設を擁した病院に発展をしていくのだという意識で頑張っておりますので、皆様にはいろんな意味で大学をサポートしていただければと思います。

内丸メディカルセンターの整備

来年秋の矢巾新病院開院後は出来るだけ早い時期に現在の歯学部のところに新しい高層の内丸メディカルセンターを建設する予定ですが、それまでの間は同センターは、現在の歯科医療センターはそのまま歯科医療センターとして、循環器センターは管理棟・医科病棟として、医学部の外来は現在の外来を、西病棟の低層棟は診断部門として利用、運営します。

内丸メディカルセンター建設後は、今の内丸地区で最後に残る建物は循環器センター、PET・リニアックセンター、看護師宿舎そして1号館と考えております。その他の建物は解体し、都市再開発エリアとして位置づけ岩手県・盛岡市と協議し、開発を行うこととなります。

矢巾新病院と内丸メディカルセンター

矢巾は治療病院、内丸は外来病院という位置づけで、場所は違いますが、二つの病院を一体化して運用します。内丸・矢巾とも最新の医療機器を備えた世界に冠たる高規格病院としなければなりません。本学の120年の歴史の中で最大の事業となるわけです。

本学を世界のトップレベルの大学として発展させたい、そういう意味でも皆様には物心両面のご支援を切にお願いを申し上げ、今矢巾の本院移転事業が順調に予定通り進んでいるということをご紹介いたしました。皆様には、大いにご期待いただければと思っております。

（平成30年度
圭陵会支部長・参与会、代議員会・総会より）

ご挨拶

岩手医科大学　学長　祖父江　憲　治

先生方におかれましては本学の運営にご理解・ご支援賜りまして、誠にありがとうございます。

特に医師国家試験については、先生方に非常にご心配をおかけしており、大変心苦しく思っております。本日は、その問題を含めましてお話をさせていただきます。

医師国家試験について

現在の本学医学部学生の状況は、上位３分の１は非常に成績が良く、全国区で十分に勝負出来る学生達です。成績中位の３分の１は平均レベルでこれも全国区で勝負出来ますが、残る下位３分の１が問題で、この中で国試にどれだけ合格するかということが国試の合格率に繋がっています。

ここ十年程の本学で行われてきた医学部におけるゆとり教育が国試の成績を低迷させる原因の一つとなっているようで、昭和51年以来２度目の全国ワーストワンという結果となってしまいました。

成績下位３分の１の学生をどのように教育して卒業させ、医師国家試験を合格させるかが重要な問題であり、特にこれらの学生に対しては、教員が学生一人一人に手を差し伸べ指導をするというかなり密な教育を施行中です。

今年、医学部で６年生の在籍者数が150人という数字が示しているように、６年生に留年生が30人も溜まるという危機的な状況となっております。この十年間、喫緊の問題として卒業生を絞ってきた結果が、高学年に留年生が増えるという悪循環に陥入ったのが原因でした。この問題を早期に解決し、留年生を減らし、より多くの学生を医師として輩出すべく努力してまいります。

その意味では、低学年時にしっかりとしたスタディスキルを身につけさせることとモチベーションを高めることが重要であり、併せて、低学年時から進級要件を厳しくする必要があると思います。

また、留年についてはこれまでの３年ルールを昨年からは２年ルールとし、学生諸君に奮起を促すこととしました。つまり、大学に適応出来ない学生に対しては、早期に別の進路を考えさせてやること、本人にとっても、ご両親にとっても、大学にとっても必要なことであると思っております。

高学年では診療参加型臨床実習の問題について考える必要があります。臨床実習は時代の変化に対応した形で出来るだけ短時間で終わらせ、その後に自学自習時間を増やす等を含め検討しており、早期に実現化したいと考えております。

矢巾新病院移転時までの医学部５・６年生の学習環境整備について

５・６年生の自学自習のための学習環境の整備については、内丸で空きのある部屋は出来るだけ学生に使えるよう検討してまいりましたが、基礎教室が矢巾に移った後の部屋は新設の臨床科が使用したりして、空いた部屋が全くない状況です。図書館（４階）・歯学部（歯科実習室）で部屋を提供いただき、出来るところから可及的速やかに自学自習出来る部屋を増やしてまいります。矢巾ではこれからの新設を含め多くの学生専用の学習部屋を準備しており、学習環境は大いに充実するものと思います。内丸キャンパスではここ１年半程の移行期は、学生諸君にも若干不便を忍んでいただくこととなろうかと思います。

しかし、学習環境の整備は重要ではありますが、学生諸君一人一人が頑張るんだという気持ちが前提です。教職員一同、学生諸君の躍進を願い、今後ともきめ細やかな対応をしてまいる所存です。

各学部の状況について

本学は、昨年度に看護学部が出来、医・歯・薬・看

の4学部体制となりました。医学部以外の各学部の国試の状況は、歯学部はどうにか苦戦状態を切り抜け、上昇気運にあります。薬学部は悪い状況にありここ数年間は大変革が必要であることから、人事を含め抜本的な改革を行っております。併せて、薬学部の教育改革のためのタスクフォース会議の指揮の下、ここ2・3年はかかると思いますが徹底的に薬学部改革を行ってまいります。

以上のように、いろんな面で先生方にご心配をおかけいたしておりますが、一日で事がなるというものではございません。少しお時間を頂くことになりますが、やれるところから順次改革してまいりたいと思っておりますので、ご理解賜りますようよろしくお願い申し上げます。

総合移転整備計画について

創立120周年記念事業として総合移転整備計画の当面の最終章は、矢巾新病院と内丸メディカルセンターの建設です。その中で、矢巾新病院に関してはこの夏過ぎくらいには11階建ての全鉄筋が組み上がり、外装・内装・医療機器搬入から設置を経て、来年の9月の開院に臨む予定です。

その後、出来るだけ早い時期に内丸メディカルセンターの建設に入ってまいりますが、その開始時期は矢巾新病院と内丸メディカルセンター相方の経営状況に依存します。両病院の速やかな船出に向け、教職員一丸となり鋭意努力しているところです。

本学の中長期のグランドデザインについて

現在我が国において、少子化・人口減少の問題は顕在化してきました。本来は首都機能の一極化を解消し東京から地方に移し分散すれば解消する問題ですが、現状の日本ではとても望めません。今後の予想では、2040年までに日本の総人口は15%以上、18歳人口は33%位減少すると考えられています。東北6県に限定すれば、18歳人口は58%減となり、北東北に限ると18歳人口はほぼ半分になります。また、いずれは東北6県自体も各県の存続が問題となり、遠い先には北東北、南東北、あるいは東北全体という行政単位へ移行する可能性すらあります。

医療・医学においても大変革が起こって来ます。東北では医療機関の集約化がかなり進行しておりますが、今後いろいろな面で大きな変化が起って来るものと予測されます。

各県に一つある医学部が存続し得なくなるという問題は、現実に迫っています。特に地方大学医学部卒業生の大多数が大都会へ行き、出身県に残らないことから、一つ一つの臨床科が成り立ち得ない、当直一つが出来ないという現実が既に起こっています。いずれは一県一医学部という体制の維持はかなり難しくなると思います。これは医学部のみならず、歯学部・薬学部・看護学部でも今後早晩起こってくる問題でもあります。

本学では、矢巾新病院、内丸メディカルセンターという医療人を育てる大きな器が出来てまいります。その中で大切なのは、いかに多くの医療人を育てて世に輩出するかということです。それと同時に、この器と人づくりを柔軟に動かす組織づくり、これが大事だろうと考えます。

本学の医学部の例ですが、これまで研修医は毎年数名から多くて10名少々でしたが、初期臨床研修センターを今年の4月から大改革しました。現在その新しい体制で動いていますが、今年度の研修医は17名に増え、今後さらに増える見込です。加えて、大切なのは、初期研修が終わり後期研修を行う専攻医です。これも今までは毎年十数名という所でしたが、今年度は41名と著明に増加しました。来年はさらに増やしてまいる所存です。

このように若い力を多数養成し、本学のみならず岩手、北東北、東北に多くの医療系人材を輩出してまいりたいと思っております。そういう意味で、今後ともに本学4学部の医療人をより多く増やして、岩手県、北東北、東北、全国に輩出する大学にしてまいります。人こそが大学の力だと考えております。

（平成30年度医学部同窓会総会、圭陵会総会より）